

大阪精神医療人権センター・権利擁護システム研究会

「精神科病院における治療文化を変えていくために」 胡桃澤伸（くるみざわしん）

キーワード：強制・管理・抑圧を変えていく、精神医療を変えるための実践、治療文化

前半 20 分 劇作の手口

◆自己紹介

1995 年春から神戸で精神科医として勤務。尼崎、東大阪、堺などで勤務。

2003 年から劇作を学び、劇作家として作品を発表。「精神病院つばき荘」「私 精神科医編」

「あなた 精神科医編」「ひなの砦」「遊んで、お父さん」「おはなし、お父さん」など。

◆この講座の目的「道具（武器）を手渡すこと」

強制・管理・抑圧を変え、精神医療を変える実践として文化を使いたい。

◆基本の考え

精神医療の土台にあるのは「病む人へ尊敬、生きることの苦しみに耐えている人への尊敬」。

「尊敬」の反対は「軽蔑・差別」。この「軽蔑・差別」をはね返すのが「人権」。精神医療が精神医療であるためには「人権」は欠かせない。なのに—

文化とは人間の営みから生まれるもの。人間らしさに満ちている。文化を産み、はぐくむことは人権の核。その文化が生まれているか、育まれているかで人権があるかないかがわかる。

◆道具①異質なものを置いてみる【手ごわい相手には硬いボールをぶつける】

例：「to be or not to be, that is question」を診察室に置いてみる。

1600 年ごろに活躍した、イギリスの劇作家シェイクスピアの作品「ハムレット」のセリフ。

おそらく世界で最も有名なセリフ。

日本語訳は「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」

ここでは「いるのか、いないのか、それが問題だ」

この言葉を診察室に置いてみる。そして、考えてみる

もし患者が「(ここに自分が) いるのか、いないのか、それが問題だ」と言ったら。

「(ここに医師が) いるのか、いないのか、それが問題だ」と言ったら。

もし医師が「(ここに自分が) いるのか、いないのか、それが問題だ」と言ったら。

「(ここに患者が) いるのか、いないのか、それが問題だ」と言ったら。

などなど。

精神医療の現状、本質が見えてくるのではないか？

◆道具②小さな言葉で大きな荷物を【蟻の一穴が壁を崩す】

例：「この病院は注射の上手な看護師さんからやめてゆきますね」

「精神病院つばき荘」の一番最初のセリフ。私が診察室で患者さんから聞いた言葉。

こころに残り、繰り返し思い出して、味わった。その結果、作品が生まれた。

短い言葉が精神医療の現状を言い当てている。

例：「精神科医に拳銃を持たせてほしい」精神病院協会の巻頭言に載った言葉

◆道具③別の方向から眺める【裏側から入り口を探す】

例：医者と患者が入れ替わる（「精神病院つばき荘」など）

例：精神病院協会のホームページを読む。新自由主義（金儲け第一主義）の本を読む。

◆道具④よそから栄養を吸収する【連帯】

例：先住民・原住民文化継承の動き。被差別部落、在日外国人の文学、思想。香港・台湾・韓国の民主化運動の技術。グローバリズム・新自由主義・植民地主義への対抗文化の実践・研究。

後半 20 分 精神医療の現状と今に至る経緯

◆医療者側の文化

劣化の一途。その大きなきっかけは3つ。もはや取り返しが見つからない。

①DMS（アメリカ発の診断基準の導入）：診断・治療が統計の材料になった。面接技術の衰退・喪失（メモを取らない。患者の顔を見る。見立てを伝える。判断の根拠を説明する。守秘義務を伝える等々が消えてなくなった）

②入院期間の3カ月制限：医療費が治療を決める。患者の治癒まで関わらない医療の出現（無責任でかまわなくなった）

③新薬：処方が大雑把になった。観察が劣化。製薬会社が薬の効果を前もって宣伝し、それが教育となった。勉強会は製薬会社がやるものになった。

◆当事者（患者）側の文化

民間伝承。病院のなかで患者から患者に伝わる治療文化。作法伝授。

ピア、当事者研究など。

◆医療者側の文化を理解するための仮説：「原子力文化」との比較

電力会社が原発を売り込むために作った「文化」

例：「日本の原発は安全です」「原子力 明るい未来のエネルギー」「プルトニウムのプルト君」「食べて応援」

精神病院協会や精神病院がホームページに掲げている文言をこの視点でかみ砕いてみる。
笑える。

裁判での精神病院側の弁論、裁判所の判決文の滑稽さが見えてくる。

◆私が吸収している医療者側の精神科治療文化

中井久夫さん、神田橋讓治さん、成田義弘さん、土居健郎さん。サリバン、バリント、ウィニコット、ベネディッティ。夏目漱石。ゴッホ。

例：中井さんの言葉と覚えて、診察室で使う。「今は治療という大仕事をしています。怠けているわけではないです」

*夏目漱石

自分自身が抱えている精神の病を見つめ、作品にした。漱石の小説を読むと自分のことが書かれているような気がする。読むと安らぐ。疲れていても読めるし、読むと疲れが取れる。ゴッホも。

◆道具⑤先輩から学ぶ【勝手に味方になってしまう】

優れたものは世の中にたくさんある。

発信の試み：ラグーナ出版（鹿児島。『書くことで精神医療を変える』）、統合失調症のひろば（日本評論社）